

---

# 東京カタストロホテル九々九九式

シラカベヒロ氏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東京カタストロホテル九々九九式

### 【Zコード】

Z9052U

### 【作者名】

シラカベヒロ氏

### 【あらすじ】

東京のカタストロなホテルで九々と九九が。

(前書き)

第六回講談社BOX-Air新人賞最終候補作です。  
零話～一話までを掲載しております。  
数ヶ月後には削除する予定ですので何卒ご了承下さい。

零話 江戸川乱歩氏が思い描かない山手線のあるコンポジション

「大人ってさ、二種類いるのね。

自分の好きなことだけやり続ける楽しくて迷惑な大人と、

自分の好きでもないことしかやり続けない悲しくて迷惑な大人。

……あーあ。大人になんかなりたくないねー」

僕の幼馴染、九流子流九が小学三年のとき言つた言葉だ。すごいませてると思う。その一つ下、小学一年だった当時の僕には、彼女の言つてる意味がよくわからなかつた。でも今は、わかる、気がする。

今。

東京は非常にカタストロフな状態にあるという噂がまことしやかに囁かれているわけだけど（主にネットとかムーとかで）、さてその噂は噂に過ぎないのかまことしやかに過ぎないのか実際問題どうなかつていうとそれはもう歴然とひやー東京は今どつてもカタストロフな状態にあるなあと僕は思つて、なんでそう思うのかつていうとごく単純、殺し屋が蔓延り殺人鬼が横行し毎日毎日人がバタバタ殺されつまりはや殺人事件は東京の日常ルーチンにしつかり組み込まれているという現状、でも事件は殺人関連だけじゃなくて、たとえば連續少女誘拐事件、たとえば謎の怪盗・骨クジラ（なんか妖怪の名前だつたからびっくり）による連續美術品盗難事件、終に妖怪の名前だつたからびっくり）による連續美術品盗難事件、ついには悪魔を呼び出して東京を壊滅させようと企むインチキくさい団体まであるとかないと、とにかく、江戸川乱歩はあれ小説家じやなくて予言者だつたんじゃないのつて思つちゃうぐらい東京は今、獵奇的なおいが漂う深く濃い闇にじんわりと包まれていた。

けど、包まれていようがなんだろうが、人々は毎朝山手線にぎぎゅ

う詰めで乗つて会社に行つて仕事して、学生は学生らしくだらだらして、そんな至つて日常的日常をつらつらーっとみんな過ごしちゃつて、じゅうどころが乱歩の描いたトウキョウと現代のこのOKYO CITYの大きな大きな差だ、と、僕は思う。実際僕も普通の大学生（美大生なんだけど果たして美大は普通の大学というカテゴリーに入るか否か、ってこれいつかディベートしてみたい）として、大学一年目の終わり、初めての長い長い春休みをだらだらだらだらつたら満喫している。今日は三月一日。あと一ヶ月以上もある僕の春休み。

それにしたつて、こんな獵奇趣味ギラギラ溢れる帝都東京に暮らしてるんだから僕が探偵だつたらこの長い長い春休みを凶悪事件の解決（いや全部は無理にしても連続少女誘拐事件ぐらいなら一ヶ月あればどうにかできるんじゃないかなーいや解決とまでいかなくても犯人の手がかりぐらいは）にあてるこども出来ただろうけど、でも残念ながら僕は探偵じゃない（そもそも今日び浮気調査以外の探偵とかいるの？）。

探偵は、濃い闇を拭い去る側の人間だ。  
しかし　　僕は探偵とは逆側の人間だ。  
つまり、濃い闇を作り出す側の人間だ。

そう、僕は。

一話 ホテル、あるいはパーティーの会場となるであろう巨大な

オブジェ

「殺し屋、やつてらっしゃるんですよね?……最後にもう一度、確認させて頂きたいんですが」ぼそぼそと男の小さな声。

「ええ、やつてますとも。二十四時間三百六十五日人生八十年常時接続いつでもどこでもやつてますとも」べらべらと男の大きな声。

一人の男の声が、ドアの向こうから聞こえてくる。僕は寝ぼけまなこで歯ブラシをしゃかしゃかやりながらそのドアを開ける。目の前に広がる広くないリビング。小さなちやぶ台を挟んでソファとパイプ椅子、という統一感ゼロの家具たち。ソファにどっかり座るがたいのいい黒スーツ男、リンカーンみたいな髪。パイプ椅子にちょっと座るひょろとした初老の男、リンカーンの秘書（想像）みたいな丸眼鏡。ちらちら一人を見ながら僕は歯をしゃこしやこ丹念に磨く。朝起きて五分以内に歯を磨くのが僕のポリシー。と、リンカーンが僕に気づいてこっちを見て、

「おおーなんだ九々人やつと起きたか。ああほら、ご挨拶しなさい、この方が」

「あ、いえいえ……私はこれで失礼しますので」

僕を見るなりそそくさと席を立つひょろひょろ眼鏡。同時にリン

カーンがソファから立ち上がり僕を指差しながら、

「まあまあ日ノ（ひの）さん、何を隠そうこいつがですな、我が事務所きつての腕利き、やり手、一押し、最先端、抱かれたい男ナンバーワン、ああいや抱かれたい男ナンバーワンはこいつじゃなく私でしょ、いやこいつ見えても私ね昔は女殺し女殺しと言われてたもんで、いや今も言われてますが、そして女殺しなんて言って本当の意味でも殺しちゃってるダブルミーニングなわけですが、なーんて」とかなんとか、がははーと大口開けて笑う。僕は歯ブラシくわえたままあぐびをふわっと一つ、目をこすりこすり洗面所へ行き、ペッと口の中の泡を吐き出してコップに水入れそれを口に入れガブガブぐじゅぐじゅペッペッペ。

すつきりした気持ちでリビングに戻るともう男一人の姿はなく、もによもによ話し声だけが玄関のほうから聞こえてきた。何を言つてるのか定かじゃないけど「ではよろしくお願ひします」「はいいえいえこちらこそ」「後ほど迎えをやりますので」「それはそれは

「どうもどうも」的な断片がちらちら。ビジネストークか大人つて大変だなでも僕も来月で二十歳＝大人があ一般的には、とあぐび混じりでふわふわ考えながらソファに腰掛けると田の前、テーブルの上に紙切れが置いてある。依頼申し込み書。

『依頼人「日ノ人成」<sup>ひのひとなり</sup> 依頼大賞「日ノ海」<sup>ひのうみ</sup>』

紙切れの一番上、依頼人と依頼対象の記入欄には神経質そうな小さい文字でそんな名前が書いてあって、ふうん同じ苗字つてことは血繋がってるのか、そんなことより『依頼大賞』つていうこのミスプリント教えてあげようかなあでも面白いからほつとこうかなあと、頭の中で架空の番組欽ちゃんの依頼大賞のオープニングテーマが流れ始める午前十時。

「あー、あれ、髪切った？ もしかして」「寝すぎですよ」とわっとした声が後ろから聞こえたので振り向くと、くすんだ紺色の制服に白いHプロン姿のあおめが立っていた。ちょっと怒ったような顔。

「ん、あれ、髪切った？ もしかして」

僕が言うとあおめはぱあーっと顔を明るくして、くぬりとその場で一回転。

「えへへ、気づきましたかあー？ 結構ぱつさり切っちゃいました。どうですか？ 変ですかねー？」

背中まん中まであつた髪が今は肩にかかるぐらいのふわふわしたセミロングになつててうーんなるほどぱつさりだと思いながら、変じゃないけどでも髪短くすると「い幼く見えるなあ、ただでさえちょい垂れ気味の目とかうつすらピンク色のほっぺたとかちっちゃな口とかちっちゃな鼻とか童顔要素満載なのに髪型変えて童顔二割り増しぐらーになつちゃつてこれじゃ四月から高校の最上級生であるといつの高校三年生になる十七歳の女の子には見えないなあ、といつのような顔を短縮した結果、

「変だねー」

と言いつと、あおめはしゅんと音出せつながらーにしゅんとした顔を

する。僕はその表情の変化をまるで四季の変化を見るような感覚で味わい深いなあと思い見ながら、

「それで、あおめは何してたの」

「何つて晩ごはんの準備ですよお

言われてみれば確かにキッチン方面から、炊飯器が出す湯気のにおいが漂ってる、気がする。

「今日の晩ごはんなに?」

「今日の晩ごはんは、「はんですよー」

うーん。

またか。

リンカーンがあおめを家に連れて来てからこの一年間、「ごはんをごはんにごはんしたこと」が何回あるか、もう正直数え切れない。なんでそんなに「ごはん（白飯つてほつの意味）」が好きなのか、いつだつたかあおめに訊いたことがあつたけど、あおめ@幼少期の結構重めなエピソードを聞かされてまあまあダメージを受けた苦い思い出がある。とにかく今夜の晩ごはんは「ごはんか。あれ? え?

「晩、ごはん、なの?」 僕が尋ねると、  
「晩、ごはんですよ?」 あおめが言つ。

「え? 晚なの」

「はい、晩です」

「今十時でしょ?」 時計を見ながら訊く。

「今十時ですよ?」 僕を見ながらあおめ。

「十時つて晩の十時なの」

「十時つて晩の十時です」

「僕……寝すぎた?」 おやるおやる訊く。

「はい、寝すぎです」 はきはきとあおめ。ああ。

春休みの弊害。昼夜逆転。というかもはや昼夜逆転のお手本みたいな生活をしてしまつてる自分、に対しても不安や失望を通り越して

もはや誇りしさを感じた。それはそれとして、

「あの人、あおめ、ずっと気になつてたんだけど

「あのや、あおめ、ずっと気になつてたんだけど

「なんですかー？」

「後ろ狙われてるよ」

「へ？」

間の抜けた声を出しながらぶつつと振り向くあおめ。あおめの背後には包丁を今にも振りかぶらんばかりに構えたポニー・テールの女の子がとびっきりの笑顔で立っている。『立つていい』も何も、あおめが登場したときから『はんの話してる間もずっと立つてた。』で、その女の子は誰かっていうと紛れもなく僕の幼馴染、九流子流くじゅうしう九だ。子流九は狼とか狐とかそういう獣偏で表せる獣の類よろしくピンと尖つたいわゆるアーモンド型の目をぱちくりさせながら、包丁を懷にしまい、にへーと笑いながら首を傾げる。それに合わせてふるつとポニー・テール（馬の首ぐらいあるでかいサイズだからテールといつぱりむしろヘッド）が揺れる。揺らしながら口を開く子流九。

「へへ、はーーあおちゃん、そして九々人」

「あー、コルクさん、来てたんですか！」「んばんわあ

「はいはいおいつすどう？殺つてる？」

殺ろうとしてたのは自分だろと思ひながら何も言わない僕。

「あれー？でもコルクさん、どこから入ってきたんですか？」

「ん？普通に壁登つて窓からよ？」

「わーすごいですね！」

「あはは、なんのなんの。十階までは地面と一緒にだしあたしこいつ

ちや

わーわーと何が嬉しいのか子流九の手をとつはしゃぐあおめ。一緒になつてはしゃぐ（というか、はしゃいでやつてるつて感じの）

子流九。僕はそんな二人をぼんやりを見ながら、

「子流九、服、汚れ付いてるよ」と教える。

「ん、どじどじ」

「おなかんどこ、白いの付いてる、ほこりみたいな」

「あー壁登つてきたからねー」

ぱんぱんと服のよごれを払う子流九。

「あと袖んとこ、赤いの付いてる、血みたいな」

「あー仕事帰りだからねー」

「じじ」と袖の血のりを手で擦る子流九。仕事帰りなんだやつぱり。改めて子流九の服装をまじまじ見てみる。黒のだぼだぼしたパーカー、中に黒のキャミソール、黒いテカテカした生地のホットパンツ、黒いソックスに黒い靴。この、子流九の肌の白さがどうしうもないぐらい際立つ黒単コーディネートこそ、子流九の仕事着。で。

子流九の仕事は、殺人鬼だ。

仕事つていうか趣味なのかも知れない。趣味を仕事にしてしまったのかも知れない（なんだかそれって理想的な生き方かも知れない）。

「んはあー。なんだろ、なんか急に氣い抜けてビツと疲れ出てきた。うへえー」

両手を上げぐぐーっと伸びをしながら、首をメトロノームみたいに振り振りぽきぽき鳴らして氣だるげに僕を見る。その様子、仕草、見た目、諸々、殺人鬼らしさなんて微塵もない、つて当たり前だけど。らしさを前面に出してる殺人鬼なんていたらあつさり捕まつてるだろうけど。とかぐだぐだ考えていると子流九が僕の顔のど真ん中を指差し、

「九々人おービアある？ ビア。一緒飲もうぜビアー」

「あーそう言われても、僕飲まないから、飲まないってか飲めないつていうか」

「お？ あそつか。あんたまだ十代か。あたしあんたの一個上か」「そうだよ自覚ないけど

「あたしも自覚ねーなあ」

「コルクさん、ビア、お父さんが冷蔵庫に入りますよー確か」「おーマジで。そんじゃ一本拝借しちゃおーへっへへ、ビアビアー」嬉しそうにひょいひょい歩きながらキッチンへ消えていく子流九。

てかなんでみんなビールのことビアって呼んでるんだ。流行りか。  
と、ほどなく子流九が缶ビア（流行りに乗つかつてみた）片手に戻  
つてくる。上機嫌でおおめの肩に手を回す。ふしゅとプルトップを開  
けて「はいあおちゃん乾びー」缶ビアをおおめのほっぺたにくつ  
つけ「ひや！ 冷たい！」びくつとするおおめを横目ににやにやし  
ながらぐびぐび飲む子流九。

### 九流子流九。

僕と十何年来の付き合いがある彼女は、どこでどう間違ったのか  
今、東京で知らない人はいない、立派な（いや立派ではないけど）  
殺人鬼になっている。通り名は「アート・キラー」。たとえばダリ  
の『記憶の固執』（時計がとろけてるやつ）とか、マルセル・デュ  
シャンの『泉』（便器のやつ）に見立てて人を殺すことからそう呼  
ばれてるんだけどそれにしてもださいネーミングだと思う。ちなみに  
にこの見立て殺人傾向は彼女の興味がシユルレアリスムとかダダイ  
ズム辺りにあるからということに起因していて、もし彼女の興味が  
ルネサンスとか印象派とかキュビズムだつたらどういう死体が転が  
ることになつてただろうとか考えて心底ぞつとする（ピカソのゲル  
ニカを模した殺人とか想像しただけで意味もなく怖いしなんかメツ  
セージ性も強い）。

「子流九さ、キュビズムとかつて好きだっけ？」

「全然無理。吐き氣する。こないだ授業で吐きかけた」

「近代美術論？」

「それ。ほんと無理。思い出しだけで気持ち悪いい」

「ピカソ」

「おえ」

「パブロ・ピカソ」

「うえつぶ」

「パブロ・ディエーゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パ（中略）ルイ  
ス・イ・ピカソ」

「おいやめる九々人殺すぞ」

僕と子流九は、今、同じ美大に通っている。僕一年生子流九二年生。ちなみに大学だけじゃなく幼稚園から小学校から高校まで全部一緒だった。中学だけ別。まあつまりほぼ一緒にここまでくると幼馴染というよりほとんど自分みたいなもんだ。気持ち悪い。ピカソのフルネームを耳にして青ざめた顔の子流九をぼーっと見る。一体ほんとに彼女はどこで道を間違えたんだろう。なぜ殺人鬼に。あれこれ考える。ああ中学のときかも。先述だけど中学は別々だったのでも、そのせいもあって僕らはちょっと疎遠だった。から、その間の子流九の変化を僕は知らない。そうか中学の可能性はあるな。ん? というか考えてみれば僕が殺し屋始めたのが中学のときだった確か。うーん、やっぱり中学つて、思春期つて、誰しもさまざま変化が起こる素敵で大事な一度と戻つてこない時間だよなあみたいな模範解答的まとめを頭の中でまとめ上げながらソファに寝つ転がって子流九とあおめのやりとりを眺める。

「あ、でさーあおちゃん、どう? 入る気なった? 「うちの組織」組織、ってなんだかずいぶん持つて回った言葉だけどでも確かに子流九が率いているのは組織だし組織としか言いようがない。あおめはその言葉を受けて、

「えつとお……うーん……」

もによもによと言葉を濁す。当然の反応だ。誰が好き好んで『東京都殺人鬼協同組合』なんていう嘘みたいでバカみたいな名前の組織に入りたがるもんか。

「あおちゃん絶対百パー素質あるんだから入ったほうが得すると思うよー人生マジで。マジで! マジで! マジで!」

あおめの肩を掴み、揺すり、熱弁する子流九。当然の行動だ。誰がどう考えたってあおめには殺人鬼の素質がある。だつて遺伝子は絶対だから。

「あのさ子流九、気になつたんだけど

「なによ九々人、気になつたことつて

「勧誘しといてなんで殺そうとしてたのあおめのこと

「えー？ それはあれよ、自分の中のシリアルキラー（殺人鬼のこと）を子流丸は専門用語つぱくそう呼ぶんだけどシリアルつて言葉ローンフレークのイメージしか湧かないからなんかちょっと可愛い感じする）の血がそうさせただけで、自分の本心としては殺したいなんて思つてなくて、なんだる、つまり自己矛盾、哲学よね哲学フィロソフィー」

妙にフィイの音だけネイティブな発音をさせる子流丸、の言葉を遮つて、

「おー九々人！ 依頼行く準備さつさとしてくれー」と、リンカーンもとい僕の父親・現戦火の、バカ野太<sup>うつせんか</sup>デカいバリトンボイスが響き渡つた。

\* \* \*

「しかしコルクお前、ちょっと見ない内にまた美人になつたなおい」「へへ、褒めてもヤラせたりしないすよおじさん」

「おーおーそりゃ残念」

ソファに深々座つてげらげら笑うリンカーンもとい父、と、ちやぶ台の上であぐらかいてけらけら笑う子流丸（お行儀が悪い）、を、パイプ椅子（ソファに寝転がつてたのにあれよあれよで追いやられた僕）に座つてぼけーっと眺める。正直、僕と父より子流丸と父のほうがよっぽど親子っぽく見えるなーとか思いながら。

「で、何しに来たんだコルクお前」ポケットから取り出したタバコにライターでぽうつと火を点けながら、のんびり喋る父。コルクはアメリカの司会者（偏見）みたいに大きく身振り手振りしながら、「勧誘つすよ、あおちゃんの。あたしってばほんとにシリアルキラーの鑑」とかなんとか言って「ねーあおちゃん、あれ読んだ？あたしがこないだ渡した雑誌いー」キッチンのほうに向かつて大声を上げる。

「はあい、ちょっとだけ読みましたあー」返つてくるあおめの声。

「どうだつたあー？」

「なんかー、えつとおー、小さい女の子の[写真があー、可愛かつたですうー」

「おーわかる? わかつた? ねーだよねー殺したいよねぶつ殺したいよねーあの子、へへへ」

「ねコルク」口を挟む僕。

「なんだよ」

「なんの本渡したのあおめに」

「児童ポルノ」

「じじポツ'えほ」勝手に咳き込む僕の体。

「へつ、嘘よ嘘よ。うちの組合の公式雑誌」

「公式雑誌」

ああそう言えばなんか聞いたことあったなとゆっくり思い出そうとしていると、子流九が懐から薄い雑誌を取り出し僕に差し出す。

『月刊・殺人鬼の友』。

冗談みたいな名前つて言えるほど冗談として完成しきれてない感が多分にあるセンスのない名前の安っぽい雑誌。表紙には何やら小さな女の子の写真（やたらぼやけてピントずれてて明らかに盗撮写真だとわかる）がでかでか。つやつやした長い髪、目が大きくてまつげが長くて言うところのフランス人形みたいで、というか目だけじやなくて全体的に人形みたいだつた、生氣のなさが。いい意味でも悪い意味でも、作り物みたいな雰囲気。

「あ、というかこれ、前も見せてもらつたよね僕」

「うん見せた。見せた読ませた感想求めた」

大学でなんかの講義中に隣に座つてた子流九にこそつと渡された記憶がある（感想文書く用の原稿用紙三枚も一緒に渡されたけど謹んで丸めて捨てた）。

子流九が雑誌をぱらぱら捲りながら喋る。

「シリアルキラー業界で今一番アツいターゲットはなんと言つても幼女! つづることでこの号は幼女特集なんだけど、『今一番』と

か言つてこれ先々々月号なんだよねー十一月号。今年入つてから一回も送られてこないのよー、つてこれも言つたけどそこないだ会つたとき

「そりだつけ」よく覚えてない（子流九の話の六割ぐらい流し聞きしちゃう癖があるんだけど、多分そのせい）。

「なんかねー、これ作つてくれてる人あたしの同業者なんだけどさ、つてそりやそうだけど、で、実はその人のことあたしよく知らないでネットで知り合つたネットだけの知り合いだからわー現代っこ、で、たら今年入つてふつつり連絡途絶えちゃつて。死んだのかなー捕まつたのかなーとか思つちゃつて、まあ同業者だしその可能性はいつも付きまとつてゐるわけで全然ありえる話なんだけど、つかもしカしたら九々人、あんた殺しちゃつたんじゃないの？ 依頼受けた？ 雑誌を一人で作つてる何者かを殺す依頼つて覚えてねえかあそんなの一まいいや。とにかく、ここ最近毎月ずっと来てないのよ送られて雑誌、今まで毎月一日にきつちり五百部送られて来てたのにさーあーつか腹減つたんでおじさん晩飯ゴチになつちやつといいすかね」

つらつらと喋り終えた子流九。父は、はつはと大口を開けて笑い、

「おーい早く飯持つてこーい」とバカみたいにでかい声。

「はーい」キッチンからあおめの声。続いてかちやかちやと食器類のと思われる音。

「ああそうだ、九々人。飯の前にこれ書け。これ……あれ、びいやつたかな」

タバコをくわえながらきょろきょろ辺りを見回す父。と、ちやぶ台の上、あぐらをかく子流九のそのあぐらの部分をじつと見て、

「あーおい、ケツ上げてくれるか

「ほいせー」机に両手ついて体を支え、ひょいと腰を上げる子流九。

「ん、コルクお前ズボンの隙間からパンツ見えてんぞ」淡々と父。

「おーマジでーじゃあ拝観料五百円ね

「おしプラス五百円出すからズボン脱いではつきり見せてくれ

「ひーなにその要求おっさんくせえー」

「だつておっさんだからなお前、今年四十三だぞ俺」

「わー後厄」

何が可笑しいのかげらげら笑う一人。仲いいなほんと。

「ああそうそう、でこれこれ、ほい九々人」

父がぐいっと子流九のお尻の下から一枚の紙を抜き取り僕に差し出す。受け取る。その紙はほんのり暖かくてもちろんそれはお尻の体温。と、にやにや笑いながら子流九が「なになに? もしかあたしのケツの暖かさ感じて興奮した?」それを完全に無視して紙を見る僕。びつつつしり文字が記されている。一文字一文字がすり潰したゴマの粉ぐらい小さくてまつたく読む気になれない。から、読まない。

「父さん」

「なんだ息子」なんだその呼び方。

「なんですかこれ」

「俺が作った契約書」

「なんの契約ですか」

「俺とお前の契約」

「なんのための契約ですか」

「お前がこの仕事をやめるための契約」

ふうと煙をたっぷり吐き出し、父は僕をまっすぐ見ながら、

「言つてたる、お前。次の依頼終わつたらやめるつて」とつぶやく。

……やめる。

殺し屋を、やめる。

もちろんそのつもりだ。

僕はきつぱり言つ。

「うん、やめ」がつしゃーん。

テレビなんかの効果音的お約束的何かが割れるけたたましい音。音のほうを見ると、あおめが片手に炊飯器を持ち、呆然とした表情

で立ちぬいていた。足元には割れた茶碗と散った米。

「……くーさん、やめちゃうんですか……？」

蚊の鳴き声みたいに（鳴かないけど、鳴いたら気持ち悪いけど）

小さな声で言うあおめ。

「え、うん、やめ」がっしゃーん。

と今度は炊飯器を落とすあおめ。もつと散る米。

「……くーさん、ほんとに、やめちゃうんですか……？」

次やめるつて言つたらぶつ倒れて自分の頭をがっしゃーんしちゃうんじゃないかという想像が頭をよぎつたので僕は無言。答えない。と、あおめの目から大粒の涙が湧き出でピンク色したほっぺたの上をぽろぽろ滑り落ちていく。えー？ なんで泣いてんだあおめ。といふか僕が殺し屋やめるのがなんでそんなにショック？ わけもわからず僕がおろおろしている間に、あおめは自分の部屋（僕の部屋でもある、一緒に住んでる）へ走り去ってしまいます。

「おーおー、穩やかじゃないねー」

月刊・殺人鬼の友をぱらぱら捲りながら興味なさげにつぶやく子流九。

「うーん、お前も俺に似て女泣かせになつたな人々」

タバコを灰皿にぐりぐりさせながら笑う父。頭一発殴つてやるつかと思つたけど理性で食い止め、とりあえずあおめを追おつと立ち上がり、ろうとしている、

「あー人々。行く前に書け、ほら早く」

父が僕の腕を掴む。なんだってそんなになんとしても書かせようとするんだと訝しく思いながらもさつさとあおめを追わないと大変なこと（具体的に言うと誰か死んだり）になりかねないので、掴まれた腕を振り払い、父が差し出す筆ペンを受け取り、さらさらつと書類の最下部、狭い空欄に署名する。現人々。<sup>うつへくと</sup>てか筆ペンついくらなんでもTPOなさすぎる。書きづらい。「父さんなんで筆ペンなんですか」「筆は日本の心だからだ」だったらペンじゃなくて本物の筆渡せよと思いながら四苦八苦しつつ署名を終え、終えてか

らまあとりあえず軽く文面読んどいたほうがいいかなーと書類に目を通す、けど文字が小さすぎて最初の二行で完全に読む気が失せる。

それを察したみたいに父が新しいタバコに火を点けながら、

「それ、要はだな、お前が二十歳になるまでに次の依頼を達成出来たら辞職を許可します、つてな内容だ」

「はあ……なるほど、条件みたいなもんですか」

「お前に簡単にやめられると、この世界で生きるの苦しくなるからなあ、俺。だからいいだろこのくらいあつても。ちょろいだろ? なあ九々人」

二十歳になるまでに達成、か。

ということは、つまり四月一日まで。

ということは、あと一ヶ月と一日。

ということは、全然余裕だ。

というか、なんで口で簡単に言える内容がこんなびっちり文字だらけの真っ黒な書類になるのかとひしひし怪しさを感じつつ、でももうサインしちゃつたししようがないか、とも思う。まだまだ寝起きだしなんだか頭がふわふわしてる。ああ、そんなことよりあおめだ。とりあえず、

「了解わかった頑張ります」

と全くこもってない（色んなものが）言葉を吐き、僕は立ち上がり自分とあおめの共同部屋に行く。ドアを開け、ようとするけど中からガタガタガシャガシャ激しい音が聞こえてきて開けるのを躊躇する。と、背後から何かがブンと僕の頭を掠めて飛んでいき、目の前、ドアにぶち当たる。どん。きき。ゆっくり開くドア。足元を見ると、落ちているのはトンカチ。振り返ると子流丸が立っていて、僕を見てにへーと笑う。

「……ん? 今、殺そうとした? 僕のこと」

「んーん、トンカチ投げる練習してただけー。実はあたしハンマー ブロス役のオーディション受かつちゃってさー

そりゃ大役だなと思いながらドアのほうを向き直ると、トンカチ

の衝撃でゆつくつきあつと開き始めていたドアはもつ完全に七分開き。部屋の中が見える。声が聞こえてくる。あおめの、あおめとは思えない声。声というか、息遣い。

ふうー、ふうー、ふうー。

荒くて熱っぽくて不規則な、野犬みたいな息遣いが聞こえてくる。息遣いの主、あおめは床に膝を付いてぺたんと座り込み、抱き締めたウサギのぬいぐるみ（僕が去年のクリスマスに買ってあげたやつ）の腹の中に手を突っ込んでは綿を取り出し引っ張り出し、引っ張り出しては投げ散らかし、ときにその綿を口に入れては飲み下し、していた。怖。と、こっちをぎろっと見るあおめ。ふうー、ふうー。

「なんだよなに見てんだよブタ男食い殺すぞてめえ」あおめの口から発せられる地鳴りみたいな低い声。「おいお前だよ聞いてんのかおいそこのケツ穴男じろじろ見てないでこっち来いよほら来たらお前の肛門取り出して食って俺の肛門から出してやるからひひひお前の肛門」うん。まあ、ぱつと見、悪魔かなんかに憑かれてるみたいだけど実際はそうじゃない、というか悪魔憑きのほうが万倍マシだと思う。これは、紛れもないあおめ自身のもう一つの顔。あおめに混じっている呪われた血（大げさかつダサイ言い方だけど嘘じゃないのでしようがない）。僕を睨みながら笑いながら口の端からよだれ垂らしながらじわじわじわゆっくり立ち上がり立つとするあおめ。あーまざいまざい。急いでポケットから携帯用千歳飴（一口サイズにカットされてる上に一粒一粒個別包装といういわゆるハイチユウ状の世にも珍しい）を取り出し、ぱこっとあおめに投げつけドアをばたんと閉める。鍵をかける（世にも珍しい外鍵）。ふうー一息つきながら振り返る。と、子流九が携帯を構えていた。

「なにしてんの子流九」

「へへ、いやーいいショットが撮れたわ。もう、そのものって表情してたよ一瞬、あおちやん」

「あそ」

といつも僕の「そ」の音にかぶるぐらいで部屋の中からぐおー

ぐあーと野犬の鳴き声みたいな、みたいなというかもう、そのもの  
な声が響き渡る。それをBGMに子流九が満足げな顔で携帯をしま  
う。

「うーんマジでいつ見ても良いよねーあおちゃん。さすがはチカち  
ゃんの孫！ つつつてね」

\* \* \*

結論から言うと、布乃目あおめは、チカちゃんという人物の孫娘  
だ。チカちゃん。本名、アンドレイ・チカチロ。ロシア人男性。1  
994年没。あおめの母方の祖父がこのチカチロさんに当たる。要  
するにあおめはいわゆるクオーターダ。ぱっと見それらしいところ  
はないんだけど、昼の太陽の下でじーっくり見ると髪の毛が若干、  
薄い金色に見えないこともない。あと左目がちょっとだけ青い（こ  
れは僕の気のせいかも知れない）。で、ちなみに、僕とあおめは兄  
妹なんだけど（あれこれ初出？）僕にそのロシアの血は混じってな  
い。なぜかつていうと単純で複雑な話、僕らは母さんが違うからだ。  
言つところの腹違い。父さんは一緒に母さんが違う。なぜかつてい  
うと単純で不純な話、父が『女泣かせ（原文ママ）』だからだ。ち  
なみに父いわく、僕が一番目の中子だそうだ。だから（だからって  
いうのもよくわかんないけど）父と僕は苗字が一緒なんだとか。そ  
して更に父いわく、僕の弟妹は全国に二十人ほどいるとかいないと  
か。それを全て集めれば願いが叶うとか叶わないとか叶わなくてい  
いしなんか怖いから僕は出来るだけ会いたくないとか。で、その二  
十人の弟妹の中の一人があおめで、あおめのおじいちゃんはロシア  
人のアンドレイ・チカチロさんで、チカチロさんはシリアルキラー  
だ。そう殺人鬼。でもただの殺人鬼じゃない。殺人鬼界で知らない  
人はいない、殺人鬼の中の殺人鬼。……らしい。子流九が言うには。  
「あのさ、僕あんまりわかんないんだけどさそつちの業界のこと、  
そんなん有名なの、あおめのお祖父さんって」

「教科書に載るレベルよ」

「なんの教科だよ気持ち悪い」

「いい？ 九々人。アンドレイ・チカチロつつのはさ、人数的に五十人そちらで別に大したことないんだけど……えーいやだつてだつたらあたしとかあなたのほうが断然殺つてるよね？ でしょ？ うん、違うの。すげえのは人数じゃなくて殺り方なのよ。なんていうかなあ……骨にしちゃうのよね、人を。骨にちょっと肉がこびりついてんなーぐらいのとここまで完全に解体しちゃうのよ。いや必ずしも全員をそうしてゐわけじゃないんだけどさ。あ、あと、食うのね。死体。いや食うのは別普通なんだけど食う部分がねー肛門と、子宮が好きなのねチカちゃんは。ちっちゃい女の子の子宮は甘いんだつてさ。少女の梨つて呼んでたらしいよ子宮のこと。へへ。詩人だよねえ。あとなんだっけ、すごいとこ。死姦とかはまあ当たり前にするんだけど、たしなみとして、あ、でもねチカちゃんは食いながら殺りながらやつちゃうみたいなとこあつて、これ貪欲でかつこよくない？ 文字そのままの肉食系つーか。あのね、生きている人間の体にかじりつきながら殺りながらやつちゃつて、でもやつちやうつて言つてもチカちゃんイ ポ（注・僕の意志で伏字にした）だからデキないから一人でオナーノ（注・僕の意志で伏字にした）しちやうのね食いながらくちやくちやく噛みながら肛門とか子宮を。なんだろうねーその姿勢、哀愁漂うというか可愛いよねなんか、へへ。あーあと肛門つてどういう味すんだろうね、これすげえ気になつてんだけどあたし。味というより食感を楽しむものっぽいよね肛門。てかその前に、肛門つてあの穴の部分のことじやなかつたの？ そういう疑問湧くよね？ だつて肛門食うつてドーナツの穴食べるみたいな不可能世界的感覚するんだけどそういうことじやないのかねえー。肛門つていう器官があるわけ？ あるならどうからどこまでが肛門？ 全然わかんないやあたし。ねー九々人、肛門のことわかる？ 肛門」

「あのさ子流九」

「なによつ

「『はん食べてるときに肛門肛門連呼するのやめてくれないかな』  
ホテルに向かつて走る車の中。あおめが握つてくれたおにぎりを  
食べながら、子流九と電話している僕。なるほど。肛門のこと考え  
ながら塩味のおにぎり食べると車に酔つてことを知つた。「てか  
子流九なんで電話してきたの」「えーだつてせつかく壁よじ登つて  
までして家寄つたのにあんたらさつさと仕事行つちゃうからなんか  
話足んなくてさー」「あそつ」「でさ肛門の話なんだけど肛門つて  
電話を切る。電源ごと。

車。依頼人の日ノ氏が手配した何やら黒光りする高級車。室内に  
つんと漂う他人の車独特の他人の車くささ（いやそうとしか言いよ  
うがないよねあの匂い）。乗つてるのは後部座席・僕とあおめ、運  
転席・黒スーツに白い手袋そして白髪の上品な初老男性（この人一  
言も喋らない）の三人。今、時間は夜の十一時過ぎ。チカチロの血  
が騒いでしまつたあおめが千歳飴を食べて落ち着いてから間もなく、  
父が「車、迎え、来てるぞ、外」とソファに座つたまま缶ビール片  
手に「あー言い忘れたけど日ノさんが経営してるホテルで泊り込み  
の依頼だ今回は。そんじや、気をつけて行つてこい。期限は一ヶ月、  
お前の誕生日デッドライン。くれぐれも頑張れよ九々人お」とかな  
んとか微妙に呂律の回らない口調で言つのでテーブルの上を見たら  
空いたビール缶が一本（ごつい見た目のわりに下戸）。僕も来月二  
十歳になれば父さんの晩酌相手とか出来るようになるわけだけど全  
然気乗りしないからしないでおこうと親子晩酌妄想を始める前に切  
り捨てた夜十一時前。から数分たつて今。車は走る夜の町。暗いけ  
ど明るい窓の外をぼーっと見ながら、おにぎりを食べ終え指にくつ  
つく米粒をなめとりなめとり隣に座るあおめに声をかける。  
「あおめ、依頼の内容つてわ、父さんからなんか聞いてる?」  
……。  
無音で十秒過ぎる。

あおめを見る。あおめは月刊・殺人鬼の友をじっくり読みふけつ

ている。

「えあおめ、なんでそれ持つてきたの？」

「えーだつて一ヶ月も滞在するんですから暇じやないですかー」

「暇だからつて別にそんな本読まなくたつて」

「甘いですねーくーさん。結構面白いんですよこれ。なんと今、殺人鬼さんたちの間では幼女が流行つてるらしいんです！」

「うんそれ子流丸に聞いた」

「私たちも流行りに乗り遅れないようにしなきやですね！」

「うんそうだね（めんどくさくなつて適当に返した）。というかなんでわざわざ滞在しなきやいけないんだらう知つてる？」「……うー酔つてきました」

「車の中で殺人鬼の本なんか読むから」

ぱたんと雑誌を閉じ目を閉じ、くつたりと横（厳密に言えば斜め）になるあおめを尻目に、僕は窓の外をぼんやり眺める。この車どこに向かつてんだろう。聞かされてない。ホテルに行くつてことだけ。ホテル。

だいたいこいつとき舞台（舞台つて言い方もなんだか気持ち悪いけど）になるホテルつて、それはそれは立派で豪勢な金持ち御用達的ホテルか、もしくは痩せこけた婆さんが一人で経営してるぼつろぼろのホーンテッドマンション的ホテルか、もしくは日本からはるか離れた太平洋沖に浮かぶ南国のは孤島の小さなリゾート的ホテルか、の三択だと思う。うーん、どうせなら金持ちホテルがいいなあと期待半分希望半分でちょっとうとしていると車が止まる。

「現九々人様。布乃目あおめ様。……到着しました」

一瞬誰の声かわからなかつた。あおめの声じゃないし僕の声じやないしといつ消去法でこの声の主が白髪の運転手のものであると判断。

「あのー、運転手さん」後部座席から声をかける。

「はい、なんでしょうか」運転席に座り前を見たままの紳士。

「その声、地声ですか？」

「はあ、ええ」

「失礼ですが、おいくつですか」

「歳ですか？ 今年で七十一になります」

「へ、は、そうですか（予想より歳いつてて驚いた、六十ちょいぐらいいだとばっかり）あー、じゃ声変わりつて終わってますよね」

「ええ、六十年ほど前に」

「ですよね、うん。ありがとう」「やれこおず」

運転主の声は、うーん、たとえば朝、電車の中で友達ときやつさや笑いながら昨夜見たテレビとかの極々つまんない話を楽しそうに喋る春先の女子高生をイメージしてもらいたいんだけど、うん、ほほそんな声だ。でも運転席に座つてるのは間違いなく白髪の七十二歳、男性。

「運転手さんすみません、あの、『先輩、もしよかつたら……一緒に帰りませんか？』って言つてみてもらえます？」

「…………はあ…………先輩、もしよかつたら、一緒に帰りませんか？」

おお。普通にちょっとどきっとした。

「じゃあ、『実は私、先輩のこと……ずっと、ずっと好きでした！』って言つてもらえます？」

「…………実は私、先輩のこと…………ええと、なんでしたつけ

「ずっと、ずっと好きでした、です」

「ずっと、ずっと好きでした」

おお。間にトラブルを挟みながらも結構グツときた。これは相当僕好みの声かも知れない。うーん。でも僕、客観的に見ると七十一の「ご年配相手に何してるんだろう。よし、客観的に見るのやめよう。」といふか着いたんだつた。着いたんだよな。「着いたんですか？」

「はい。到着しました」「うーん、声可愛いな運転手さん。こんな声の子がもし学校にいたら顔がそこそこバスでも惚れる自信ある。まあいいや、とりあえず車降りよつ、の前に」「あおめ、着いたよ」隣を見る。あおめは完全に斜め七十度くらいの角度で傾き座席にもたれるというかめり込むようにしてすうすう寝息を立てている。「あ

おめ「すうすう。」「あおめ」すうすう。「あおめ」すうすう。もつ  
いいか。あおめをほつと/orを開け一歩踏み出し車を降りる。  
夜。ひんやりした空氣と踏みしめるアスファルトの硬さ。田の前を  
見る。

さつき、僕は三つの可能性を考えた。

金持ちホテル。ホーンテッドホテル。南国リゾートホテル。  
だけど今、目の前にそびえ立つホテルはそのどれでもない。  
正面玄関上方に堂々とゴシック体で書かれたホテルの名前、それ  
は。

「……西成イン、ってこれ」

紛うことなく。

紛うことなく、ビジネスホテル。

……わー、すごいテンション下がってきた。

一二話 少女は赤の中で暮らす（そこにある死の危険）

田の前、職員室にあるような事務机、その椅子に腰掛ける日ノ人  
成氏に向かつて僕は言つ。

「三百です、ざつと」

日ノ氏は真ん丸い眼鏡の奥の小さな目を、最大限真ん丸にする。  
「はあ、それは……予想以上でした」  
まあそういうな、と思いながら、僕はふわとあぐびをする。  
「それで、現さん……その、こんなこと訊いていいものかどうかわ  
かりませんが」

「彼女はいませんよ」

「え、あ、そうですか……いえ、そうではなく」

「あおめですか？ あれはただの妹です」

「はあ、いえあの、そうでなく」

「なのでもし欲しければ差し上げます」

「現さん、あの、私が訊きたいのは」

「あおめのスリーサイズとかは知らないですよたすがに。まあ並つてどこだと思いますが」

「あの、そもそも私、そのあおめという方がどなたなのか、よく「あ、そっか。あのですね、あおめってのは僕の妹で、助手で、今車の中で寝てます」

「そうですか、え、起こして差し上げなくていいんですか？」

「いいんですいいんです。助手って言つても大して役に立たないし、僕が意図してない余計な殺し勝手にしちゃうし……うーん、こう考

えるとあおめってむしろちょっと邪魔』『じさどさつ。背後から物音。

振り返ると、我こそは偶然という猛者が全国から集まつた第一回果然コンテストで見事グランプリを受賞できるぐらい偶然とした表情のあおめが、半開きのドアの向こうに立つていた。足元にはボクシングのトレーニングで使うサンドバッグが一つ転がつていて、え？と思つてよく見るとそれはパンパンに膨らんだドラムバッグつまりドラム型旅行カバンだった。で、あおめを見ると、ぼろぼろぼろひとつ大きな目から大きな水滴が溢れ出していて、あ、これまずいなと思つた僕はすかさず前言の『あおめってむしろちょっと邪魔』に繋げて「だと思われがちなんですけど！ 全然邪魔じゃないんですよこれが！ ほんとにあおめにはいつも助けられっぱなしで！ それがあおめが家に来てからのこの一年間、毎日が嘘みたいに楽しくつて！ 充実してて！ ああ僕は最高の妹に恵まれてるなつて！ 神様に感謝してるんです！ 僕は幸せです！」

現状思いつく限りの口から出まかせを一通り出まかし終え、恐る恐るあおめを見るともうすっかり泣き止んでいた。むしろほんわか笑つてた。ああ、単純つて可愛いなと思つた。

「あ、やっと来たのあおめ。遅いよ」とか我ながら白々しいセリフ。「えへへ……」めんなさい

少し顔を赤らめて、にまにましながら巨大なドラムバッグ一つを抱え、とてとて部屋に入つてくるあおめ。

「どうかあおめ荷物多くない？ そんな親の仇みたいでかいバツグ二つもいる？」

「えーだつて一ヶ月いなきやかもなんですよ？」

「それどう見ても半年分あるよ荷物量」

「うーん、私、旅行つてしたことないんで……ひょっとわくわくしあ過ぎちゃつたかも知れないですなー……えへへ」

この『旅行したことない』つていうキーワードは深く掘り下げるときつとブルーな話になるなどピンときたので僕はそれ以上突っ込まない。これが優しさ。で、

「えー、なんの話でしたっけ」

僕が訊くと、日ノ氏はぽかーんとした表情で僕を見て、

「え？」と言ひ。

「いや何かの話の途中だつたよ」

「はあ、そう、でしたかね」

「おそらく

僕と日ノ氏が首を傾げながら中断された自分たちの会話の続きを思い出す作業にふけつてゐる間、あおめは部屋の隅っこにしゃがみ込んでドラムバッグを開けて服とかお菓子を取り出しては「服よーし」やら「お菓子よーし」やら、指差し声出し確認をしていた。しばらくそれをぼーっと見てたら思い出した。

「何か僕に訊きたいことがあるんじゃなかつたでしたっけ？」日ノ氏  
さん

「あ、ああ、そうでした。ええと……」「ほ、と小さく咳払いをして、日ノ氏は声を潜め、「今までなさつてきた三百の中での、その……特に大きな事例は、どうこううものがありましたか

なるほど。

心底くだらない質問だ。と、思いつつ、

「大統領殺しですかね」

せつと、田ノ氏の顔色が変わった。具体的には、肌色からつづく  
ら黒っぽい赤色に。

「それは……あの、もしかして」

「あ一国の特定とかはやめときましょ。ビリで何をビリの盗聴されてるかわかったもんじゃないし、ああ、別にこれは田ノさんを疑つてるとかそういうわけじゃないんですけど」

「……はあ、しかし」

明らかに動搖（緊張？）した表情（タモリ的なレベルの芸能人になりつつちやつてどきどき、みたいな表情）の田ノ氏を見ながら色々思い出す。大統領殺しつて言つても別にそんなに大変じゃなかつたんだよなあー電話しただけだし。ああでもインドネシア語を覚えるのは大変だつたな。あ、あと国際電話の電話代こつち持ちつていの聞かされてなかつたから翌月お金が相当苦しかつた。子流丸にちょっと借りたりした（まだ返してないやそつ言えば）。

「あの、他には、どういつ」

おーおー欲しがるなあと田ノ氏を見ながら感心半分呆れ半分。まあ依頼主である田ノ氏としてはこいつの実績はそりや氣になつて当然か。しょうがないので、

「やぐやー組丸ごと皆殺し、とかですかね」

うーん。事実なんだけど口に出して言つとめつちやくちや安っぽい。漫画「ラクみたい」（いや批判してるわけじゃない）。それでも田の前の田ノ氏は、

「や、それは、もしかしてあの」とか早口で食いついてくる。

「あ一組の特定はやめましょ」

「はあ、はい……それで、他には」

「どんだけ欲しがるんだよと思いながら、うーんと考え、

「そうですね、なんだろ、いわゆる新興宗教団体？ みたいなのが潰したことがありましたね。うん。これは簡単でした。集団自殺とかしそうじゃないですかそういう団体。だから結び付けやすくて。これ結構面白かったんですね、やってて、我ながら手際よかつた

「どうか、うん。あ、これ手順としてはですね、まず教祖を」「あー……すみませんが、そろそろ肝心の依頼内容、お話ししていいでしょうか」

うわー急に食いつきが失せた。自分から訊いてきたくせになんだよこの態度の急変。腑に落ちないまま、とりあえず頷く。日ノ氏は背中を丸め前傾姿勢になり、丸眼鏡を小さくずり上げ、僕をじっと見る。

「……娘を、殺して頂きたいのです」

ふん。

そんなとこだと思った。

脳裏に浮かぶ自宅で見た依頼書。

『依頼人「日ノ人成」 依頼大賞「日ノ海』』

あ。“大賞”的誤字、教えるの忘れた……まいいか。

「娘はこのホテルの七〇七号室で暮らしています。現さんたちは同じフロアの七〇三号室にお泊まり頂き、これから娘の家庭教師ということでひとつ、上手いことやって頂ければ」

なんで娘さんホテルで暮らしてんだと当然のように疑問が湧くけど別段仕事に関係ないので詳しくは訊かない。黙つてこくこく頷いておく。

「しかし」

日ノ氏が急に声のボリュームを上げる。ドスの利いた声。華奢な外見に似つかわしくない声。

「……条件が一つ、ござります」

眼鏡の奥の目が光る。いや眼鏡が光つただけかも知れないけど。どちらにしても妙にギラギラした顔色の日ノ氏。

「娘の描いている絵が、完成してから、殺して頂きたいのです」「……絵、ですか？」

「ええ、絵です」

「絵?」

「ええ」

「え、絵？」

「ええ、絵」

「え？ 絵？ ええ絵？ え？」

「……あの、現さん、話し先に進めていいでしょうか」

「あ、どうぞ」もうちょっとHの音で遊んでいたかつた名残惜しさ。「ほん。小さく咳払いをし、日ノ氏がまた声を潜める。

「单刀直入に言うとですね、娘は、絵の天才なのです。……実は、この西成イングループは、娘の絵を売つて得た資産で築き上げたものなのです」

「……はあ、それはそれは（うわーす）い嘘くさいなというか自分が大学で絵の勉強してるだけに絵の天才とかいう単語にわざに信じられないなというかまず自分の娘のこと天才って言つか？ 言えちゃうか？ 親バカにもほどが）……ん？ でも、なら、なんで殺すんです」

そこで日ノ氏はより一層前傾姿勢になり、より一層声を潜め、もうほとんど吐息のような音量で言ひ。

「娘の脳を買いたいと言つ学者がいるのです。なんでも、某国の脳科学の権威だそうで、娘の絵をオークションで度々、高額購入していた人物なのですが……絵だけでは物足りなくなつたのか、その絵を創り出す、脳が欲しいと」

うーん。なんだか急にマツドな話になつてきた。僕こういう眉唾な話、あんまり好きじゃないんだよなーと内心辟易しながらそれを顔には出さず、「なるほどふむふむ」とか適当な相槌を打つ。

「まあ、ということで、ですね。まとめますと」

じつとり湿つた目で僕を見る日ノ氏。

「守つて頂きたいことは、二つ。

一つ、娘の脳に損傷を『えないのでください』。 脳がダメになると、元も子もないですからね。

二つ、絵が完成するまでは娘を死なせないでください。 娘が今描いている絵は、遺作としてもう高値で買い手が付いているのです。

三つ、絵の完成を見届けたら速やかに殺してください。

先方は

娘の脳が送られてくるのを今か今かと心待ちにされています。一刻も早くお届けしたいじゃないですか、こむらとしても。

……では、くれぐれも、よろしくお願ひ致します

「……わかりました」

って言つて気づいたけど今、結構適当に聞いてた。やっぱいつ日  
がもう思い出せない。メモついたほうがよかつたな、と思つて「  
あーすみません、あの、条件、もつかに言つてもれますか？ あ  
おめ、メモとかある？」「はいどうぞー」すつとメモ用紙（片面印  
刷のチラシを四角く切つて束ねて右上に穴開けて紐通してまとめた  
往年の主婦が作りそうなやつ）と筆ペンを差し出してくるあおめ。  
受け取つて、「さすがあおめ」軽く頭撫でてやる。「えへへ」すぽ  
んと筆ペンのキャップをはずす。「じゃ、もつかいお願ひします」  
てかまた筆ペンか。デジャヴ。

\* \* \*

「ふうん、ま、珍しいことじやねーよ全然。知つてる？ いや知ら  
ないと思つけど、研究のためとかなんとかでチカちゃんの脳みそを  
買いたがってる日本の商社があるつて噂あつてぞ、ん？ いやいや  
あくまで噂で、実際は誰も買つてないんだけど。でも買つて研究し  
てどうすんだらうね？ チカちゃんのね、フランケンショタインみ  
たいの作つたりすんのかね？ わかんねえけど。あーで、あたし思  
つたんだけども、あおちゃんのもも、脳みそ、そこそこ高く売れち  
やうんじやねえのかなーとかさ。いやだつてチカちゃんの血い混じ  
つてんじやん。買いたがるどつかのバカがいてもおかしかないよね  
ー？ へへへへへ、え？ いや別に今の笑いに深い意味はねえよ  
？ うん。あおちゃん殺そつかなー殺して脳みそ叩き売つちゃおつ  
かなーつてだけで、それ以外の深い意味は全然。へへへ、へへ  
「子流丸、ビール何本飲んだの」

「一」

「二？」

「ケース」

は、とため息が口から勝手に漏れた。びりりで受話器の向こうから酒臭い息がふんふん漂つてくるわけだ（言葉のあや）。「あー、じや僕、忙しいからこれで。あれだったら僕の部屋に泊まつていいから、布団とか勝手に敷いて」「あ、もう敷いてる、し、入ってる、し、さつきよつとゲロ引つ掛けちゃった。悪いい。へへ。うへーくせー、へへへ。でもまあ親愛なるあたしのゲロだし見た目もゲロの中では割かしいい色したゲロだしこれなら九々人ゲロ得ゲ口得」電話を切る。は、ともう一度ため息。ん。視線を感じる。顔を上げる。ホテルマンが僕を訝しげにじっと見ている。目が合ひ。ホテルマンの目はビー玉みたいに青くギロギロ光っている。思わず見とれてしまう。数秒。

「……あの、お客様、私の顔が、どうかしましたでしょうか？」

「あー、なんでもないです。というかすみません、電話、長々使つてしまつて」

「いえ……かまいませんが」

壁に掛かっている時計の針はもう深夜一時過ぎ。そりやまあこんな時間にフロントに酔っ払いから電話かかってきて（ちなみに僕が携帯の電源切つてたからわざわざホテルにかけたんだとか）、そのまま長々十分も一十分もくつちやべつて、更に受話器の向こうから脳みそだのゲロだの殺すだのいう不穏な言葉の断片が漏れ聞こえてきたら健全なホテルマンなら訝しく思つて当然だよなーと、しみじみ思う。しみじみ思いながら再度まじまじホテルマンの顔を見る。見ながら訊く。

「あの……ちよつとお伺いしたいんですけど」

「なんでしょう」

「その日、ビー玉ですか？ あんまりにも青く透明に光つてるので」

「いえ、違いますよ」

うん、そりやそうだ、我ながらバカくさい。と、ホテルマンが静かに顔を右手で覆い、かくんと小さく首を揺らした。それから手を離し「どうだ」手のひらを僕に見せる。そこには青く光る球体。

「これはビー玉ではなく、スーパーボールです」

なるほど、こいつやって見ると確かに青くて透明だけビー玉とは全然違う、よく跳ねそうなゴムっぽい球体。顔を上げる。右目の中分がぽつかりほら穴みたくなってるホテルマン。うわー、これ今日夢に出そう。すぐ目をそらす。

「あの、ありがとうございました」

「いえいえ、それではごゆっくり」

なんでも訊いてみるもんだなあと思ひながらそそぐセフロントを後にする。後にするつて言つてもほんのちょっと離れるだけ。正面玄関入つてすぐ脇にある小さな休憩スペースへ。所要時間わずか十秒足らず。一人掛けのソファが四つ、大きなガラスのテーブルが一つ。ソファはテーブルをぐるつと囲むように並べてあって、上から見たらきっとサイコロの五みたいな感じに見えるだろう間取り（間じやないけど）。の、ソファの一つにちょこんと座つて、あおめは例の雑誌を読みふけつていた。

「あのさあおめ、いくら人が少ないとは言え公共の場で月刊・殺人鬼の友読むのはＴＰＯなさ過ぎるかな、うん」

「え、あー、すみません……ふあ」ぱたんと雑誌を閉じながらあくびをして、慌てて口を手で押さえ「うあ……すみません」あおめ、二度謝る。

「眠いかあ、ま、そりやそりや、じゃあおひさヒターゲットと顔合わせだけで、早く寝よう」

「はい！」あおめがすたつと立ち上がる。手ぶら。手ぶら？

「あれ？ 荷物は？」

「あ、ホテルマンの人人が先に持つていってくれましたー。優しいですよね！」

「まあそれが仕事だしね」

「そっかあ、人に優しくするのがホテルマンのお仕事なんですねー」「うんそうだねー（めんどくさくなつて適当に返した）」

まあでも、ビジネスホテルでそんなサービスつて普通ないよなあと思ひ、やっぱり日ノ氏の招いた密つてことで待遇良くなつてるんだな僕ら、とその事実になんだかちょっと樂しくなる心。フロントで鍵を受け取り、鍵の番号を見、「七〇三」呟いて確認、エレベーターホールへ向かう。とてとて後ろからあおめがついてくる。上ボタンを押す。

「そういえば、くーさんが電話してる間、何人か私の前、通つて行きましたよー」

「え、ほんとに？」背向けて電話してたから全然気づかなかつた。「なんかですねー、黒い服着た男の人とか、黒い服着た女人の人とか、黒い服着たコルクさんとかあ」

「ふうん」ちーん。エレベーター到着。開く。中には誰もいない。乗り込む。7のボタンを押す。閉まる。じゅりじゅりりん、と電子的な木琴の音が聞こえる。あおめがわたわたと制服の胸ポケットから携帯を取り出した（ちなみにあおめは制服で学校に行き制服で外出して制服で寝る制服ヘビーコーザー）。

「なに、メール？」

「あ、えと、はい」

「こんな時間に？」

「あ、はい……」

「誰から？」

「…………あ、はい」とまるで噛み合わない返事。メール読むのに夢中で上の空らしい。ちん。到着。七階。開くドア。降りる僕。降りてこないあおめ。

「あおめー」

呼びかけてもあおめは相変わらず携帯を見たまま「……あ、はい」とか言うだけ。その表情はなんだか少しばにかんでいるようにも見えて、うーんこれつてもしかしたらもしかしてと思い「そのメール、

男から？」と訊くと即反応、携帯から顔を上げハツとした表情で僕を見て「え、ちつ、違いま」しゅうづーと閉まるエレベータードア。絶妙。ドア上の階数表示ランプが1と書かれたほうへどんどん進んでいく。さよならあおめ。とりあえずこのままここで待ってるのも手持ち無沙汰なので一足先に部屋に向かう。

落ち着いたトーンの茶色のカーペット。その上を音もなく歩いていく。静かな廊下。そりやそうだ。もう深夜。ビジネスホテルっていうぐらいだからビジネスに使う客が多いわけで、ビジネスってことは朝がめちゃくちゃ早い（つてイメージある）わけで、ということはみんな早く寝てるわけで、ということは当然こんな時間に廊下歩いてるのなんて僕一人ぐらいのもん『とす』 という小気味良い音と共に目の前に突如現れたそれ。壁に突き刺さったそれ。びよんびよんと上下に揺れるそれ。バトル・ロワイアルにおける男子一番・赤松義生の武器であるそれ。それ。そう。ボウガン。

うーん、ほんもの初めて見た。思つてたより丈夫そつ。上手くやれば象とか殺せそう。さて考える。僕から見て右側から飛んできて、左側の壁に突き刺さったボウガンの矢。ということで、必然的にといつか本能的にといつか機械的にといつか、右側、ボウガンを撃つた人物のいるであろう方向を見る。

黒いパークー。

黒いキャミソール。

黒いホットパンツ。

白い肌。ちょっとだけ赤い頬。

僕の部屋の、僕の布団に入っているはずの九流子流九が、にやにや笑顔で立っていた。ボウガンの本体片手に。

「えつす。おばんちわー」

「何してんの子流九」

「マンハント」

「わー物騒」

「ねー物験」

「……ところで子流九、僕の家で僕の布団に入つてたんじゃ」

「あーあれ嘘。あの電話してるときあんたの後ろ歩いてたもんあたし。ちなみにもしもし私メリーサン」

「へえ。じゃあ今日は壁登つてこなかったの」

「バカヤロ酔つてるから無理に決まつてんだろ。飲酒登壁は危険なんだぞう、ううー」

「げふう、と酒くさいゲップを一発かましてくすくす笑いながら子流九は懐から矢を取り出しボウガン本体にちやちやっとセツトしてはいチーズ」僕の眉間に狙いを定める。

「……あー、あのさ、死ぬ前にひとつ言い残したいんだけど」

「おうおうなによう」

「子流九はさ、『アート・キラー』でしょ？ ボウガンで僕撃ち殺して、それ何の作品に見立てたつもり？ どいついう意図の殺人？」

「う」

子流九がボウガンを構えたまま固まる。

「僕あんまりシユルレアリスムとかダダとか詳しくないけどさ、矢が人に刺さつてるだけって、そんなモチーフなんだか安易すぎてその辺の流れに沿つてない気がするんだけどなあ」

「……うう」

「子流九の殺しつてもつとこう、破壊的というか、衝動的というかそういう熱？ みたいのなかつたつけ？ ボウガンで撃ち殺してはい片付いた、そんなつまんない殺しするよになつたの？ だとしたら僕、ちょっと……悲しいよ」

「…………う、うう」

低く悔しそうにうなりながら子流九がボウガンを下ろした。口から出まかせ成功。ふうと安堵のため息的息が漏れる。ま、相手が子流九であろうが誰だろうが、僕の口に叶うわけがない。この口が、口だけが、僕の唯一の武器なんだから。

子流九がずるずる壁に寄りかかりペたんと力なく床に座り込む。

「あたしさあ……」つい……最近スランプなんだわ、マジで、珍しく弱弱しい声を出す子流九に、なんだかちょっとわくわくした。そんな僕のわくわくを知る由もなく弱弱しいまま喋る子流九。

「今日や、あんたんち寄る前に仕事してきたつづたじやん。あれもさ、実は上手くいかなくてさあ……腕もいだりとか、目引っこ抜いたりとか、一応やつてはみたんだけど全然しつくりこないつつうか無理してやつてる感があつて……なんかこう、湧いてこないんだよね、衝動が。そう、衝動、衝動……うん、はあ」

わーこれはだいぶ参つてゐるな子流九、と見たことない聞いたことない彼女の弱音にじう言葉をかけたものか頭を搔き搔き迷つていると、エレベーターホールのほうから、

「あーコルクさん！ わつきぶりです！ コルクさんも七階なんですか？」

やつと戻つてきたあおめの嬉しそうな大声。深夜だつていうのにあまりに思慮の足りてない大声。そんなこと気にせずあおめはぱたぱた音を鳴らして小走りで近寄つてきながらなおも大声を張り上げる。

「コルクさんさつき一階で、電話しながらつづつてあたしの前通り過ぎて行つちやうからわーと思つたんですよー？ 無視されちゃつたのかなあつて思つて、ちょっと落ち込んでたんですけどから、もーその子流九はといふと、カーペットに寝つ転がつてすびすび寝息を立てていた。「あれー？ コルクさん寝ちゃつたんですかー？」喋るあおめと寝る子流九。うーんどうしようもない。そして迷惑この上ない。ホテルに対して申し訳ない。といふかあれ？

僕なにじょうとしてたんだっけ？

\* \* \*

僕なにじょうとしてたんだっけ？ の答えは以下のとおり。  
寝ちゃつた子流九の世話をあおめに任せたあおめに部屋の鍵も渡

し、ターゲットである少女・日ノ海のいる七〇七号室に向かいノックしようと思つて手を止める。冷静に考えればもう夜中の三時近く、こんな時間に今日から雇われました家庭教師です明日からよろしくねとか言いに来る奴はどう考えたって怪しいし怪しいと思われちゃうのは僕の仕事的に百害あって一利なしだし、じゃあもういや今日はやめとこうつてことでなんにもしないまま七〇七を後にする。少し歩いて、僕が今日から泊まる部屋・七〇三号室に入るとあおめと子流丸がシングルベッドですやすや気持ちよさそうに並んで寝ていて、しょうがないのでソファに横になつた。数時間前まで寝てたせいで全然眠れなかつた。以上。

\* \* \*

「んで、どうだつたのその女の子。もう殺つた？」

朝。ホテル一階奥の小さなレストランで、向かいに座る子流丸が巨大ポニー・テールをふさふさ揺らしながら、パンをむしゃむしゃ食べ食べ僕に訊いてくる。口の中丸見え。

「殺るどころかまだ会つてもないよ」

「とろつ。バカじやねえの」

「といふか会つてもすぐには殺れないし」

「なにそれバカじやねえの」

「絵が完成してから殺るつて決まりで」

「意味わかんねバカじやねえの」

「僕としてもさつさと終わらせたいんだけどそつもいかず」

「バカじやねえのバカじやねえのバカじやねえの」

子流丸はパンをむしゃむしゃむしゃむしゃ食べながらただひたすらにバカじやねえのを繰り返す。よくわからないけど不機嫌つぽい。あの日なのかなーとかぼやぼや考えて、あんまりそういうことを考えるもんじゃないかなーと少し反省する。子流丸はコップに並々入ったオレンジジュースをがぶ飲みし、ふはあと一息ついて、

「で、九々人、あおちゃんはー？」

「あおめは学校」

「学校かーってそりゃそつか、まだ春休みじゃねえもんね高校生は。つーかあれよね。あおちゃんよく普通に学校とか行けるよなあの体质で。大丈夫なの？ クラスマートの命は」

「うーん、大丈夫なんぢゃない？ 詳しくは知らない、わかんない」「なんだよお前無関心かよ。妹ともひとつゴミゴニケーションとれよこのクソ兄貴いー」

へつと笑つて子流九は席を立ち、パンのおかわり（四回目）とオレンジジュースのおかわり（七回目）を持つてくるべく料理の置いてあるテーブルへ（朝食はバイキング制）。しかしクソ兄貴つて無茶苦茶な言われようだなあと思ひながらふわーっとあぐびを一発かましつつ、周囲のテーブルを見る。朝食をとつたり新聞を読んだりテレビを見たりしている他の客たち。黒いスーツの男が数人、黒い着物を着たおばあさんが一人、黒いジャージ上下を着た女の子が一人、ついでに言えば子流九も黒のパークーに黒のホットパンツに諸々にという黒ずくめスタイル。これじゃもうレストランつていうか葬式だなど眠い頭でぼやぼや思う。僕だけ黒くない格好（白いシャツに青いジーパン）でとつても空氣読めてない感じ。子流九が皿いつぱいのパンと並々のオレンジジュースを持って帰ってきて、がたんと乱雑に椅子を引き、どすんと乱暴に腰掛ける。

「ね、あんたさ、五月祭の準備してる？」

「五月祭って？」

「五月にある祭りよ

「うわー聞くまでもない情報」

ああ、そういうえば入学して一ヶ月たった頃つまり五月、にあつたなんなか、祭り。教室、廊下、食堂、駐車場、トイレ。大学敷地内のありとあらゆるところに適当な絵（例・キャンバスの真ん中に小指の爪サイズの小さな赤い点が三つ。それだけ）なり適当なオブジェ（例・大量のリラックマのぬいぐるみをゴミ袋にぎゅうぎゅうに

詰めたもの。それだけ)なりが適当に「ぐるぐる飾つてあつた。そんな祭り。でも言つてもそういう創作物が展示されてるだけで、屋台的なものとか模擬店的なものは一つもなかつた。けどあれが祭り。そうがあれ五月祭つて名前だつたんだ、と今、初めて知る。

「五月祭つて全員参加なの?」

「別にそういうわけじゃねーけど出といたほうが楽しいんじゃない出ないよりかは幾分か」なるほど正論。

「子流九つて去年なに出したの」「ねーテレビのリモコンどこにあんだけ、「ニユース聞きたい。聞こえない」きょろきょろ辺りを見回す子流九。「あれじゃない?あの、おばあさんのテーブルの上」「おマジだ畜生、ばあさんチャンネル権独占かよ。ね九々人とつてきて」「やだよめんじくさい」「とつてこないとひどい殺し方で殺す」「具体的には?」「生きたまま田玉くり抜いてコトコト三日間煮込んでシチュー作つてたんと食わす」「そりやひどい」くすぐる楽しそうに笑う子流九、を尻目に、乗り気じやないまま立ち上がりて黒い着物の老婆の元へ向かう。傍まで近づいても老婆は僕を見ず、ただじつとテレビを見ている。「あー子流九、リモコンこれとつてこなくとも、音量だけ上げればいいかな?」と振り向きながら尋ねる。子流九はハムスターみたいに夢中でパンをむぐむぐ口の中に詰め込んでいた。全然こつち見てない。パンだけを見る。もういか。「ちょっと、すみません」と一応おばあさんに詫びを入れつつ手を伸ばし、テーブル上のリモコンの音量ボタンを人差し指で素早くトトトと三連打、に合わせて、

『るのはミムラサクラちゃん七歳。三月一日夕方頃、小学校からの下校中に何者かに連れ去られたものと見られており、警視庁はサクラちゃんの通学路近辺の住民に目撃情』

と、まあまあ響き出すニユースの声。こんなもんでいいか音量。

「ありがとうございました」と一応老婆に礼を言ひ。老婆は全然僕を見ない。ただテレビを食い入るようにじーっと見ている。テレビつ子め。「食後のコーヒーいかがでしょうか」横から不意に声。お

－サービスいいなあビジホ（ビジネスホテルの略、これ一般的？）の癖して。「あ、ありがとうございます」差し出されたコーヒーカップを受け取り、立ち上る湯気の香りを楽しみつつ自分の席に戻ることんとカツプ置く。「で子流九、去年の五月祭つて」ぱあん！右頬にビンタを食らう。「静かにしろ、ニュース聞こえない」理不尽にじんじんするほっぺたを手でさすりながら僕は黙る。

『に入つて都内での小学生女児の行方不明件数は七件と相次いでおり、警視庁では事件の関連性について調』

なにが面白いのか子流九は口元を緩ませにやにや笑いながらテレビを射抜くように見つめている。怖。「で子流九、去年の五月祭つて」ぱあん！左頬にビンタを食らう。右をぶたれて左もぶたれてさながら僕はマハトマ・ガンジー。「黙れつてば九々人、ニュース聞いてんのあたしわかる？」「わかる、わかった」

『に通う大学生クルマダエミルさんの遺体が発見されたのは、千代田区神田神保町三丁目付近の交差点で、遺体には何者かに首を絞められた痕跡があり、警視』

さつきの行方不明事件とはまた別の、なにやら陰惨な事件の報道。いつもどおりの東京の朝。テレビを見る子流九の目は朝日みたいにキラキラしていて、うーん、怖。

『頃から都内で相次いでいる一連の通り魔殺人事件に関して、警視庁は同一犯の犯行である可能性が高いと見て、エミルさん殺害事件との関連性』

「これよこれ」

子流九が急に声を上げる。

「このパッショń。情熱。あふれ出るエネルギー！ 東京つてすげえよね、あたしらが小学生だつた頃からなんにも変わつてないよね。毎日のよう日に事件が起こつて人死にが出て。いいよね。いいよね。これよ。これなのよ。今があたしに足りないパッショńは！」

子流九は喋つてるうちにどんどん勢いづいてきたのか知らないけど睡をぱっぱ飛ばしまくりながらバシバシ手でテーブルを打ち鳴ら

していく、うーんめんどくさいなあと思いつながら「コーヒーを一口飲む。

「仕事スランプつたじゃんあたし昨日」

「え、ああ、うん」言つてたつけ、あんま覚えてない。

「あれ脱するわ、脱さなきやさ、五月祭でいいもん作れない気がしてんの。なんつーの、殺しの熱量とダダシユル（ダダイズムとシユルレアリスムを一緒にした造語？）の熱量はおんなじだと思ったのあたし！」あーそろそろ行きたいなあ、朝ごはん食べ終わつたし食後のコーヒーも飲んだし（一口飲んで飽きた）。「あんたあれわかる？ アンダルシアの犬つていう、映画なんだけれど、ダリが脚本やつた、シユルレアリスムの、で、あれになぞらえた殺しどかやつたら面白いんじゃないかつてピーンと」延々喋り続ける子流九にうんうんと適当な相槌を打ち続ける僕。あーどうしよう。ほんとにそろそろ行きたいなあ。他の客たちはみんな、どんどん席を立ち始めている。どんどん人がいなくなるレストラン。そしてあつさり僕らは一人きりになる。「最高でしょ？ 絶対面白いでしょ？ あとさあたし思いついたんだけど瓶掛けってあるじゃんデュシャンの。あの瓶掛けを手に入れてさ、瓶掛けるフックの部分に殺した奴の目鼻口とかモツとかを一つずつ掛けるつていう瓶掛けならぬ人掛け（じんかけ）！ どう？ ね、どう？ うぐう」

変な音を立てて突然、子流九が黙つた。目の前、子流九の首には背後からしわしわの手が伸びている。伸びているつていうか、絞めている。強めで。

「えう、え、うが、ぐ」

田を白黒させて体をばたつかせてポニー テールをぶるんぶるん揺らして口の端から涎をぽたぽた垂らす子流九。彼女の首を絞めるしわしわの手は小刻みに震えていて、相当力入つてることが傍目にもわかる。で、そのしわしわの手の主はというともちろんしわしわな人で、つまり老人で、つまり先ほどの黒い着物のおばあさん。音もなく現れるとはまさにこのことで、ほんとにいつの間に、いな

くなつたと思つたのに。子流丸の背後に佇み首を強く絞め続ける老婆の目は今もずっとテレビを見続けている。テレビっ子め。

「げ、げ、げ」

「え」とか「うが」とか言つてた子流丸は次第に「げ」以外の音を発さなくなつてきていて、ああ終わりが近そだなあとしみじみ思いながら「コーヒーを一口。うーん、それにしても凶悪殺人鬼アート・キラーの最後をこんなS席で見れるとは。全然どうでもいいプレミアム感。

と、老婆が不意に手を離した。

「ぐあつほ、つはつ」「ほ、がほつ、が、じつ」「

もちろんわざとじやないのはわかつてゐるけどどうにもわざとらしく見えぢやうボリュームの咳を何度も何度も繰り返す子流丸、の背後、老婆はいつの間にかテレビではなく、僕をじつと見つめている。冷たい目。ゆっくり開く口。

「……この子、処女？」

口から漏れ出了たカラカラに掠れた声。えー初対面で訊く内容かそれ、とびっくりしながらも、さつきテレビのリモコンを押借した義理があるので（いやないけどね、別にこのおばあさんのリモコンじゃないし）とりあえず答えようと思った。けど、うーん、どうなんだろう。そんな突つ込んだ話はしたことがない。とりあえず一つ言えることは、僕と子流丸はそういう関係になつたことはないってことだけで、それだけじゃ答えにならないし。「おあ、げつは、かは、ぐううええ」首絞め解放から数秒たつた子流丸がどえらい勢いで咳き込み出し、大量の唾+リバースしたと思われるゲル状のパンをテレビの上にぐしゃぐしゃ吐き散らしていく。あ、なんか処女じやないっぽいなあキャラ的にこういう子は、と固定観念の助けを借りながらそういう考えに至り、「あ、処女じゃないです」とひりつと答える。

老婆は、ち、と小むく舌打ちをし、たかと思つと、そのまますたずた静かに去つていった。ぽかんとその様子を見つめていると突然、

がいーんという鈍い金属音と共に頭部に重い衝撃が「痛つ！」真っ白、ちかちかする目で前を見ると子流九が人殺せそうな大きさのフライパンを握り締め、涙目で僕を睨んでいた。

「助けるよ！　あたし死ぬとこだつただろうが！」

「いや、うん、なんかつい見ちゃつた」

「お前マジで殺す絶対殺す、殺す殺す殺す」

「はは、現職の殺人鬼に殺すつて言わると逆に実感湧かないなあぐううー」

喉の奥から聞いたことない間抜けな音が出た。と、思つたらふわっと体が軽くなつてぐらつと頭が重くなつて。

暗転。

。

明転。

子流九がじーっと僕を上から見下ろしていた。え？

「どえー」

どういう状況？　つて言いたかったのに舌がびりびりして上手く回らず、どえー。結果、図らずも、江戸を業界風に言つた感じになつた。

「盛られてたぞー人々」

うわ毒か、と「盛られてた」つてワードだけで判断出来る僕もどうかと思う（まあ言つてもちょっとこの世界長い人なら盛り＝毒つてのは常識なわけで、余談だけど、だから僕盛りそばつて食べれない）。丸三日徹夜したみたいな視界の悪さとぼんやり加減で辺りを見回す。めちゃめちゃ頭重かつたので首は動かさず目だけで。あ、ここレストランだ。僕床に寝てんのかこれ。

「どなう」

毒つて何に？　つて訊きたかったのに口から出たのは、どなう。結果、図らずも、美しく青き川の名前になつた。でも子流九は僕の言わんとしたことを察したらしく、

「あんたコーヒー飲んでたでしょ？　あれだね間違いなく

「なー（なんで？ つて言つたつもり）」

「つかしいなあと思つてたんだよねあたし。だつてコーヒーとかなかつたんだもん、バイキングに

「え（え？ つて言つたつもり。成功した）」

「あんたあの「コーヒーどつからとつてきたの？」

えーどつからとつてきたんだつけなあ、思い出そうにも頭が重くて全然思い出せない。うーん。とりあえず死ななくてよかつた。あ、吐きそう。

\* \* \*

「そりいえばさ、さつきフライパンで僕殴つたでしょ子流九。あれフライパンどつから出したの」「

「ん？ 懐

「ふうん。なんでもかんでも懐から出すねー」「そうねえ。そういうとこあらあねーあたし。つか九々人あんた毒もう平氣なの」「

「ん？ ちょっと舌びりぴりするけどその程度」

「ふうん。あんた毒とか強い人だつたつけ」「

「そうだね、そういうとこあるねー僕。ちっちやい頃、父さんによく飲まされてたから」「

そんな、とつてもどつでもいい会話をしながら廊下をだらだら歩く僕ら。落ち着いたトーンの茶色のカーペット。品のいい明るさの照明。等間隔に配置された小さな窓。ビジホのわりにしつかりしたりだなあと昨夜も思つたけど改めて思つ。何も知らない人が内装の写真だけ見れば一流とまでいかなくとも二流とまでいかなくとも二・五流ホテルくらいには見えそう、な気がする。ほどなく七〇七号室に辿り着く。僕らの部屋、七〇三号室の隣の隣の隣。

ドアの前。僕は一度、小さく深呼吸して、後ろに立つ子流九を振り返る。

「子流九。ひとついいかな」

「おう。なんでもこいよ」

「君、なんでいるの？」

ぽかんと大きく口を開け、僕をじっと見つめる子流九の尖った目。

「なにそれ？なぜあたしがこの世にいるのかってこと？」そりや

お前、両親がセック

「ああいや違くてそうじゃなくて」

「そうじゃないことがあるかよお前。人は誰しも絶対セック」

「えつとそうこう」とじや」「セック」「子流九」「セック」「子

流九」「セック

「子流九。それ一旦しまおう。片付けよう。忘れよう。そうじゃなくてね、なんで、ホテルにいるの？」ってこと

僕の言葉に、はあ？と大口ぽつかーんと音が出そうなくらい開け、それから、うーんと首をひねり、

「面白そうだから」

と子流九はシンプルな答えを僕に叩きつける。

「あたし面白を至上主義なのね。面白そうならなんでもやるし面白そうならどこでも行きたいし今までずっとそうやって生きてきたりそうやって人殺してきたし」

「あそう」「面白そうで殺された人たまたもんじゃないな」「え、あたし、いや迷惑……？」

田をじんわり潤ませ、上目使いで僕を見る子流九。うわー確実に意図的作為的。は、と軽くため息をつき、

「別にいいけど、仕事の邪魔はしないでね」と僕が言つと、

「おう、保障出来かねる」と不穏な返事。まあいいやもつ。で。

田ノ氏から預かつた七〇七号室の合鍵を、鍵穴にゆっくり差しみ静かに回す。かち。硬い感触が手に伝わる。小さく深呼吸する。ゆっくり、ドアを押し開けていく。つん、と乾いた何か（嗅いだことのある、何か）の匂いが鼻を掠める。ゆっくり、足を踏み入れる。

ゆっくり。

まず、田に飛び込んできたのは、赤色だった。

何が赤色かというと、部屋そのものが、だ。

壁、柱、カーペット、天井、そしてきつちり閉められたカーテン。ありとあらゆるものが真っ赤だった。ペンキのような赤。というか、事実、よく目を凝らして見ればそれは本当にペンキらしかった。ところどころ、乾いてひび割れている。部屋全体、赤いペンキで塗られている。その毒々しいぐらい赤いカーペットへ、一步踏み出す。ぱり、と小さく音が鳴る。薄い薄い薄い氷を踏んだような感覚が足に。歩く。ぱり、ぱり、ぱり。

部屋 자체は僕の泊まっている七〇二号室と何も変わらない。テレビがあつて、机と椅子があつて、電話があつて、ソファがあつて、ベッドがあつて。ただ、全部赤い。真っ赤。だけども、本当の真っ赤ではなく、ところどころ塗りきれていない部分もある。雑な、真っ赤。

「えーと……こんにちは。海ちゃん……いるかな」

こるはづの少女の姿が見えないので、おそるおそる声をかけてみる。返事はない。部屋の真ん中くらいまで入り、ぐるりと三百六十度見回す。見当たらない。

「九々人おー、部屋、赤いねー」

すつごく見たまま感じたままの感想を述べ、子流丸は赤いベッドにじりんと横になつて「うひゃー布団も枕もパリパリ」何が面白いのかけらけら笑い転げている。僕はそれを尻目に、とりあえずベッドに腰掛ける。うーんキンクさい。気持ち悪。

と。

さあ、といつ音と共に、玄関脇にあるドアがゆっくり開いた。咄嗟に目をやる。僕らの部屋の構造を当てはめると、それはバスルームにあたるドア。少しだけ、息を飲む。ベッドから立ち上がる僕。ドアの向こうから現れる人影。小さな人影。

少女だった。予想通りというかなんというか、少女だった。

真っ白なワンピースに身を包んだ少女。

つやつやした長い髪、目が大きくてまつげが長くて言ひにくいのフランス人形みたいで、というか目だけじゃなくて全体的に人形みたいな、生氣のなさ漂う、作り物みたいな、少女。

あれ？ この子どつかでみたことあるなー、と思いつつ。

「あ、えっと、はじめてまして。お父さんから説明あつ」あ、思い出した。この子、あれだ『月刊・殺人鬼の友』十一月号の、表紙の。「……君が、日ノ、海ちや」どん！ 突然。

耳をつんざく爆発音。体を揺らす破裂音。

音の発生源は 探るまでもなく、今、目の前に見えてる。

静かに佇む少女の周りでもうもうと立つ白煙と、ベッドの上で仁王立つ子流九が構えている巨大なもの、の関係性を考えればとつても明らか。

「うわクソはずしたありえねええええあああああ！」

「……あー、子流九」

「なんだよドブ野郎！」相當興奮してるらしく、ジャングル的ボリュームで叫ぶ子流九。

「それなに？ その、手に持つてるもの」

「ロケットランチャーだよ！」

「……どこから出したの」

「パークーの懐だよ！ おなじみの！」

唾を吐き散らし叫び散らしながらチャカチャカチャカと子流九がパークーの懐を漁り始めたので、あ、これ二発目撃つなと思い、思つたときには僕はもうベッドにダイブをキメていた。具体的に言うとベッドの上に仁王立つ子流九の脚に向かつてタックルを、アメフト的な感じで。「えわー！」ぐらつき倒れ込む子流九。上に馬乗り押さえ込む僕。

「なんだよおい九々人！ わけわかんねえタイミングでサカつてんじゃねえぞドブ野郎！」

「サカつてないっていうかとりあえずそれ手から離そう子流九」

もつれもつれながらどうにか口ケットランチャヤー（今さら言つた  
ど実物初めて見た）を奪い、ぽいつと床に投げ捨てる。『こいん、と  
鈍い音。ふうと一息汗を拭う、と、子流九が何やらパークーの懷に  
手を突っ込んで『こいん』そしているのが見え、速やかに再度タックル  
をキメる僕。

「なんだよ九々人！　だからサカつてんじゃねえよ・ 空氣とタイ  
ミング読んで発情しろよ！　ムードによつてはあたしだつてちゃん  
と受け入れるつづーんだよ！」

「訊いてないつていうかとりあえずパークー脱<sup>こう</sup>子流九」

「脱がそうとすんじやねえよ！　やっぱサカつてんじゃんか！」

「いやそりゃなくつていうか仕事の邪魔しないでつて言つたでし  
よ僕」

「保障出来かねるつて言つただろうがあたし！」

うわー確かに、と思いながらそれでもなんとか子流九の物騒な黒  
パークーを脱がそうと必死でもつれもつれしていると。  
ぱんつ。

またしても破裂音。でも今度のは小さい（あくまで口ケットラン  
チャヤーと比べるとの話）。

反射的に少女のほうを見る。少女はどこか眠そうなほんやりとし  
た目で、ベッドの上でもつれ合つ僕らをじつと見ている。少女の無  
事は確認出来た。よし。ほつとしながらでもよーく見ると、少女の  
そのほんやりした目が微妙に僕らを捉えていないことに気づく。ど  
こ見てるんだ？　僕の…………あ、後ろ？

振り返る。

黒い丸が目の前にあつた。

あ。

これ銃口だ、と一秒くらいで気づく。

その銃口の向こうには黒いジャージ姿の女の子が立っている。そんな遠近法。……あれ？ この子どつかで見たな、と思っていると

そのどつかで見た子が銃の引き金に掛けた指にくいつと小さく力を込めだした、ので僕はその銃口を人差し指でふにっと塞ぐ。

「あー、えつと……お嬢さん（名前わかんないから暫定的にこう呼んだ、すごいださい）。もし夢幻紳士の冒険活劇編読んだことあつたら知てるかもしねいけど、この状態で銃撃つたら、君の手、吹き飛ぶよ」

「えーそうなの？ それどういづ原理？」背後から興味津々で覗き込んでくる千流九。

「えつとね、僕もよくわからんないんだけど、とにかく銃身が破裂しちゃうらしい、んだけど、どうだら、怪しいよね」

「うーん確かに怪しいなー」

「怪しいからとつあえず、ここはこいつして切り抜けるのが得策だよね」

の、「ね」の音に力を込めながらトスツと、銃口を塞いでないほうの手で黒ジャージ少女のおなか（具体的に言つとおへその下三センチの場所）に突きを入れる。そう、急所。その昔、父に習つた微かな記憶。ぐ、だか、う、だか、言葉にならない声を小さく漏らして少女はその場にばつたん。うーん。暴力はあんまり僕のポリシーじゃないんだけどなあとため息つきつき苦笑いくらいながら隣を見ると床に転がるロケットランチャーを今まさに拾い上げようとする子流九。もちろんすぐおなかに突きを入れる。子流九もばつたん。うーん。僕結構あれだな。強いんだな。新たな自分を発見出来て不思議な達成感に浸る。ふと、我に返る。……視線を感じる。

少女　日ノ海の、眠そうな、ぼんやりした、生気の感じられな  
い、そして少し訝しげな視線。

辺りを見回す。無造作に転がる一人の女の子と、壁にでかでか空いた口ケットランチャーの穴。あー終末的。そりや訝しげな視線投げかけられるよなー。とりあえずなんか言つてごまかそう、と僕の

口から出た言葉は、

「あ、ははは、あとでまた来まーす  
……わー、ださい。」

(後書き)

二話目以降は、7／15時点ではまだこの世にありません。  
超頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9052u/>

東京カタストロホテル九々九九式

2011年7月16日03時12分発行